

津高同窓会報

発行所

津市新町3丁目1-1

津高等学校
同窓会事務局TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

仲間・思ふ・新しい生活へ

ごあいさつ

同窓会長 飯田俊司(昭和36年卒)



川喜田貞久前会長が去る六月六日に急逝されたため、六月二十三日の代議員会にて思いがけなくも同窓会の会長に選任されました。川喜田前会長は百五銀行の頭取、会長と要職を歴任され、経営者として辣腕を振るわれました。一方で、クラシック音楽をこよなく愛し、また大変な読書家でもありました。作家、ジャンルとも幅広く、読書量も極めて多い優れた文化人、教養人でもあり、同窓会にとって惜しい人を失い

ました。

私は昭和三十六年に津高を卒業しました。津高在学中は、三年間とも若林実先生の数学の授業についていくのが精一杯で、クラブ活動もせず、まさに灰色の高校生活でありました。昭和四十一年に百五銀行に入行、平成十七年四月に会長に就任し、現在に至っております。仕事に対してもお客様に対しても「誠心・誠意」を心掛けた四十一年間の銀行員生活であります。

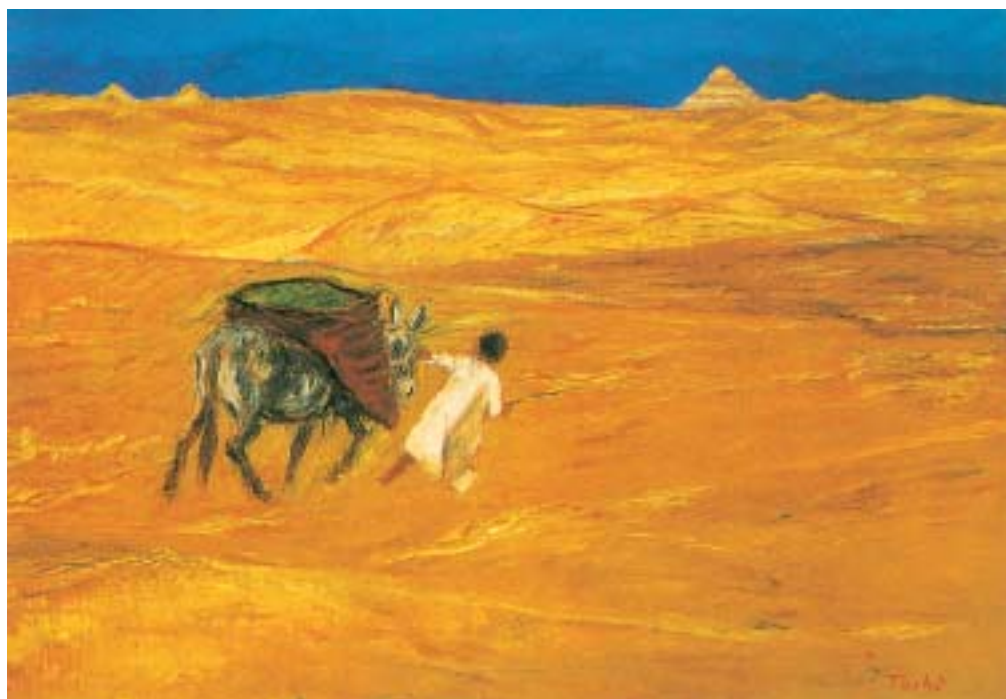
趣味は釣りですが、この釣りから仕事その他の教訓を多く得ました。

一口に釣りと言いますが、対象魚によって釣り場所、釣り方、仕掛けなどは千差万別です。私のは船で出掛けて鯛やイサキなどを釣る「沖釣り」です。

「沖釣り」も奥が深く、船頭、釣師の腕前よりも、一日の間で変化する水温、潮の流れなど自然環境の変化で釣果が左右されることが多く、これらの条件が整って魚がよく釣れる「時刻・ころあい」を釣りでは「時合(じあい)」といいます。この「時合」は長時間続く日もあれば、短時間で終わったり、全くない日もあります。「時合」の短い日や全くない日は、どれだけ腕が良くても大漁は望めません。

仕事などでいくら努力をしても結果が出ない時はよくありますが、いつか「時合」が来て報われると考えます。

今年の総会・パーティーは八月四日に昭和四十九年・六十一年卒業の皆様のご尽力により開催されました。出席者は約七百人と多く、「会員相互の連携と親睦をあつくする」という目的通り、会場のおちこちで旧交を温め合うなどで時間の経つのも忘れ、盛況裏に



タイトル・書「平成19年度同窓パーティーテーマ」より
絵「サッカラのピラミッド」

工藤雅俊(昭和45年卒)
若林利重(昭和12年卒)

閉会となったことを報告してご挨拶と

いたします。

ごあいさつ	2	金蘭会と私	5
アンコール遺跡を訪ねて	2	風土病研究から鳥インフルエンザ	8
七十八歳の筋トレ	3	防疫へ	8
友情と思い出	3	「津高同窓会報」の題字、及び	9
老害学習?	4	表題を書くに当たって	10
津高同窓会長・川喜田貞久氏を偲ぶ	4	最近の「理科離れ」に思う	10
三重桜陳川に負ける	5	通信業界での二〇年	11
		同窓会副会長就任のご挨拶	8
		津高33同窓会スイス9日間の旅	8
		自分を成長させた佐賀インターハイ	9
		全国高校囲碁選手権に出場して	10
		津高校進路指導状況	10
		各地で同窓会開催	11

ごあいさつ



学校長 渡辺 久孝

出会い」をテーマに約七百名の会員の皆様がお集まりになり、今年もその活気に圧倒されました。

会員の皆様方には、ご健勝にて活躍のこととお慶び申し上げます。平素は本校の教育活動にご理解とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

八月に開催されました陳川・三重校・津高同窓会は「仲間・思い出・新しい

育てたい」という願いを持って、授業力の向上やキャリア教育の推進などに取組んでおります。ご報告したいのは、本年度から五カ年の文部科学省のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けたことです。この事業は、科学技術や理科・数学教育を重点的にを行い、日本の将来に有為な科学技術系

アンコール遺跡を訪ねて

下河茂朗（陳川・昭和17年卒）

平成十八年三月私はアンコール遺跡（カンボジア王国）を旅して来た。アンコール遺跡は十二世紀を中心に建造

された石造大寺院群で周囲に濠をめぐらせた世界遺産である。その規模の壮大華麗さと随所に見られる石造彫刻の



人材の育成を図ることを目的とする、国が特に力を入れている事業です。現在、三重大学を初めてとして多くの大学のご協力を得て、一年生を中心に、授業、夏休みのフィールドワーク、三重大学の授業を受講するなどの取組を始めました。きつと将来、本校から、ノーベル賞受賞者が現れるものと夢見ています。

話題としては、「本校生徒美術作品十八年間の歩み展（十月五日から八日まで総合文化センター第二ギャラリーにて）」、そして、「日・中・韓おことの調べ（十一月九日夜津リージョンプラザにて）」の開催です。美術展は月輪教諭の本校での十八年間の指導の中

魅力は、往時の文化の高さと生活様式を今に伝える。

田舎の子供達の遊びやトンレサップ湖の漁師の生活を見て、私は昭和初期の日本の農漁村の生活を思い出した。

シュムレアップ市のホテルのロビーにシアヌーク国王の肖像画が掲げられていた。私の質問に従業員は「今日の平和は国王のお陰です。」と言って合掌した。また市場で会った市民は「今朝も私がお供えを持って寺へお参りして来ました。私達にはクメール文化と仏教の教えがあります。」と話してくれた。

この国の人達の穏やかな生活、人懐っこい笑顔、素朴、親切等の魅力が強く私の心に残っている。

仏教寺院は、彼等の心のよりどころ

で、現役・卒業生が残してくれた作品や今回出展頂いた作品合わせて約二百五十点が楽しめ、多くの方々にご来場頂きました。おここの演奏会は津市の市民団体から日中国交正常化三十五周年等の記念事業としてお誘いを頂き、邦楽部が出演し、国際交流部、美術部、新聞部等が協力させて頂き、演奏と国際交流の観点からも意義ある催しとなりました。

部活動は各部が大変熱心に取り組む陸上部、ボート部、音楽部などは全国レベルで健闘しています。とりわけ、陸上部の小野真弘君は、インターハイ円盤投げで全国六位と昨年の七位に引き続き二年連続の入賞です。ボート部

で信仰の対象となっているようだ。

遺跡の説明を省きこの国の歴史と政治についてふれてみたい。私は今、一九七五年から二十年間続いた激しいカンボジア内戦を思い出している。この内戦では同じ民族同志がフンセン、ロンノル、ポルポトやシアヌークの諸流にわかれて戦い、特にクメール、ルージュ政権下では、宗教の禁止、家族の解体、移住等社会構造の徹底破壊を行い、強制労働、処刑や餓え等で百五十万人以上が死亡した。（国民の六人に一人の割合）約三十年近くたって、ようやく国際法で当時の政権幹部を裁く運びとなった。（野口元郎裁判官談―国連クメールルージュ裁判）

私は今まで多くの国で民族間紛争や

もダブルスカルで、長谷川大洋君・市野史憲君ペアはベスト十六と健闘しました。そして、闇雲翼君は全国高校囲碁選手権及び全国高等学校総合文化祭囲碁部門で、それぞれ三位という快挙をとげました。このように、勉強は言うに及ばず部活動やいろんな分野で頑張るといふ津高の伝統が引き継がれていると、会員の皆様に思っ頂ければ幸いです。

最後になりますが、会員の皆様のご活躍とご健勝をお祈りして挨拶いたします。

戦争を見聞きして来た。その結果「多くの宗教の中で仏教は、他の宗教に対して最も寛容な宗教である。」「仏教の精神で戦争が防げぬか。」と長年考えて来た。

野口氏によると「仏教国カンボジアの場合、百五十万人が殺されたのに、その刑事責任を誰もとつていない。」「自国で正義が実現せず何をしても罰せられぬ現実には許されるべきでない。」と語る。

私はこの国の人達のやさしさと共に、悲しさやつらい事に身を挺して当たらると言う積極的な強さがカンボジアの若者にも、現代の日本の若者にも欠けてしまった事に気がついて居る。

私はまた往時内戦の諸派に自国の都合で援助し、内戦を激化させ地雷を敷設し、不信任を増大させた援助国政府の責任も明らかにしたいと思つた。

我が国では戦争は総て悪であり不戦こそ正義であると言われる。然し世界の歴史を見ると「不戦」を唱えるのみでは平和は達成出来ない。

日本は平和国家を叫ぶ以上、先頭に立って世界平和に貢献する行動を起こ

七十八歳の筋トレ

太田

等(陳川・昭和22年卒)



さん、色川武大さんがおられた。私は、『靴みがき』と題する短編を書き、はじめて活字になって、朝日新聞の同人雑誌で取りあげられた。

大学を卒業しても就職をせずに小説を書きつづけた。しかし、純文学では容易に食えない。大衆小説を書いて出版社へ持ちこんだ。その持ち込み先で

さねばならない。それは戦争に巻き込まれぬ為の自己保全行動ではない。加えて今の国連のあり方も不満である。日本は国連改革を含む平和の再構築のために、国家戦略の論議を更に重ねる必要を痛感する。

誘われて編集者になった。娯楽読物や大衆小説の月刊誌を出している小さな出版社だった。売れる作品が、どんなものか、わかってきたころ、私の小説もようやく売れはじめた。編集者をやめると、太田瓢一郎のペンネームで、時代小説を書き出した。

昭和三十三年から三十六年にかけて、

長編時代小説を三十数冊書き下ろしている。ところが、執筆の過労と、日に八十本の煙草、過度の飲酒などのせいで、肺結核になり、半年間入院した。

健康を気遣うようになったのは、結核が治ってからである。山登りや魚釣りなど遊びも健康的になり、四十七歳のころから、スポーツジムに通って筋トレをはじめた。

太田蘭三とペンネームを変えて、長編山岳推理小説を書き出したのは、昭和五十三年である。最初の作品は『殺

意の三面峡谷』。以来長編推理小説を書きつづけている。若いころの時代小説を合わせると、著書は、とつとつ百冊を超えた。

六十五歳のときに煙草をやめた。筋トレと晩酌は、いまもつづけている。七十八歳の筋トレである。いまは自宅をやっている。

二〇キロのバーベルを持って、ベンチプレスが四十回。ベンチにあおむけに寝て、両手でバーベルを差しあげる。五キロのダンベルで、ラテラルレイズを二十回。ベンチで、あおむけになり、両手にダンベルを持って、腕を左右に開く。膝の屈伸のスクワット、寝て上体を起こすシットアップも百回。五十九歳からはじめたスキームつづけている。身長一六八センチ。体重七〇キロ。作家に定年はなく、まだまだ元気でいる。

部に勤務、科長、処長として工業経営に従事し、一九八九年、六十一歳で定年退職をいたしました。

機械工業部勤務中、私は技術考察団の一員として、一九六四年と一九六五年に三度、日本に伺いました。

一九六四年七月は「中国光学機械参観団」同年十二月は「中国溶接代表団」翌一九六五年七月は「中国技術輸入会社機械設備考察団」による訪日です。

日本国際貿易促進協会、或いは日中貿易促進会のご接待で、東京・横浜・大阪・神戸・京都・名古屋等都市にあ

る七十名のメーカーと大学研究所を見学し、多くの学者技術者と懇談し、技術の交流と貿易往来について話し合いました。

当時はまだ中日の友好は回復しておらず、個人として母校を訪ねることはできませんでした。

一九七二年に中日友好が回復、一九七八年中国は改革開放の政策を確立し、中日貿易と友好往来がだんだん盛んになり、私は一九八四年十二月「中国北方工業会社倉庫考察団」の一員として再び訪日することができました。この時、李恵発さん、海住嘉之さんを経て母校と連絡がつき、私は三十九年ぶりに母校を訪れ、十五日午前、学校で留学当時の木葉信弘先生、同級生小林重一さん、学校長袖野貞三先生、長谷川寛先生、千種嘉夫先生達と楽しく懇談することができました。午後は歓迎会に出席して同級生や寮生達二十余人にお会いし、親しく昔を懐かしみました。

一九九一年、津中昭和二十三年卒業訪中友情旅行団二十五名の同窓生を迎え、北京で観光の案内をいたしました。

一九九二年、同窓会総会のお招きで、家内を伴い、九十二年度の同窓会総会に出席させて頂き、六百余人の同窓生に会うことができました。また、同級生交歓会、伊勢志摩同窓会、美杉同窓会、東京同窓会等を経て木葉先生、米本先生並びに七十余名の同窓生とお会いすることができました。一九八六年から二〇〇六年までに私が北京で迎え

友情と思い出

霍

順

田(陳川・昭和19年入)



時は戦争で生活の苦しい時期でしたが、クラス担任の一見先生、寄宿舎の舎監・寺田先生、木葉先生達からいろいろな氣を使つて頂き、また寮生からも食べ物を戴き本当に助かりました。今も思い出すたびに感謝しております。

私は一九四四年四月から一九四五年七月まで津中学校に留学しました。当

帰国後も、当地の学校で勉強を続け、一九五二年、中国中央政府の機械工業

た同窓生は、個人としては海住嘉之さん北村尚臣さんなど八名です。

本年は中日友好回復三十五周年の意義ある年です。同窓生との友好往来を通じて、お互いの友情と親交を深めることは中日両国の友好発展に大きく貢

老害学習？

小西



孝(陳川・昭和21年入)

献するものと確信します。私は中日両国民の友好が世々代々まで続くように頑張っていけます。

同窓生多数の中国訪問を期待します。北京でお会いしましょう。

一九四六年(昭和21年)旧制の津中学校に入学し、津駅から久居駅まで電車通学したのが楽しく、帰りに津新町の闇市をうつろってきたこともありました。ところがGHQの6・3・3・4制改正命令で旧制中学の解体が決まり、新制津高等学校に改組され、中学二年生だった私たちの行くところがなくなってしまう。その頃父は戦地から復員し、古巣の京都府立医科大学に戻っていました。私たち家族も五年間の津での疎開を終え京都に帰りました。その後、私は、京都府立山城高校(京三中)に入学し直し、大学に進みました。

大学では繊維学を経て高分子学を学び、そのまますると大学にはびり定年を迎えました。大学も時々刻々進化しているために、四〇歳を過ぎてから、私の研究分野もだんだん国際化され、苦手な英語論文、英会話に悩まされました。ところが、定年退官後、顧問や非常勤講師をやっていますが、大学の委員会や教授会などの雑用がなくなると、落ち着いて勉強できる環境が得られ、置き去りにしていた学会を覗くようになりました。とくに繊維高分子学の構造を見るのに電子顕微鏡を使っていたことから、電子顕微鏡関係の国内外学会には現在も参加しております。医師だった祖父、父も患者さんの回虫の卵を顕微鏡で見ていたのが、脳のどこかに残っていたのかも知れません。

一つに、インターネットを見ている時間が多くなったことがあります。面白いことに、英語の読解力が現役在職中よりも増しているのです。インターネットは座ったまま世界の情報、買い物、そして株式売買も動かなくてもできるのです。私も航空券や学会申し込みをインターネットでするため、郵便局に行かなくてもいいのです。老人ホームなどで、老人にパソコンの使い方からよりもインターネットだけを教える、ぼけ封じにも効果があると思われま。以前から電子顕微鏡で原子を見ることはできたのですが、レンズのひずみのため解像力が悪く、教科書に出てくるような分子模型は現れません。宇宙望遠鏡ハッブルはレンズのひずみを除くため高速コンピュータが附属しています。今、私が興味を持っているのは、これを電子顕微鏡に取り付けてレンズのひずみをゼロにする研究です。原子を直接観察することによって、地球に住む動植物の病気を直すことや寿命スィッチのできる時代が私の存命中にどれだけ進歩するのか楽しみにしています。二〇〇七年八月に米国のフロリダのフォート・ローダーデールで行われた顕微鏡学会に行つて参りました。その時、連れて行った中学二年生の孫に大学生用学生会員の資格を取らせました。結果、中学二年生の英語力でも結構通用することがわかったのは大きな収穫でした。

(京都工芸繊維大学名誉教授)

津高同窓会長・

川喜田貞久氏を偲ぶ

筒井 忠 勝(昭和27年卒)

同級生の逝去ほど悲しく、心に残るものはない。

旧制津中学、津高校と共に学び、大学は違ったが東京で共に学生生活を送った。

学校の帰りに津市垂水の千歳山にある川喜田家に遊びに行くと彼の母親が夕食を用意してくれた。あまり食料に余裕のない時代であったが、カレーライスがよく食卓に出された美味しかった。

高校二年の時、彼は学習院へ転校した。ところが二期期になると津高校の教室にいてではないか。「どうして戻ってきたのか。」と質問すると、「学習院は面白くない学校だから退学してきた。」と事もなげにいう。私は彼の帰郷を喜び反骨精神は痛快に思えた。その後、東京の大学に進学した気のあつ連中が新宿の喫茶店に金曜日の夜、集まるようになった。いつも七、八人が合流し文学、哲学、政治を論じた。楽しいグループ付合いが続いた。彼は、その中心にいた。この会は、それ以後、年一回程度の集まりとなり夫人同伴の交流になった。

大学卒業後、三和銀行に入行した。同窓の淑夫人と結婚しニューヨーク

支店勤務になった。その後、百五銀行に入行し頭取に就任した。平成の大不況、銀行も倒産する時代であったが、持ち前の豊かな指導力で百五銀行を地方銀行の上位クラスに押し挙げた。あまり自慢話を好まない人物だったが、百五銀行のAクラス入りには、ほっとした表情で語ったことが印象に残る。

その頃、津高校同窓会長に就任し、毎年の総会で行つた会長挨拶には腐心していた。読書家であり、感銘を受けた著書や絵画について意見をもち我々に開陳するのが好きであった。その片鱗を見せず会長挨拶にさりりと表現するつまさががあった。残念ながら会長挨拶は、もつ聞けない。

銀行頭取職の宿命でもある数多くの社会的役職を抱えた。文化、芸術、ボランティア活動など、多忙な任務をこなしてきた。予想より早く頭取を引退したので長い余生に備えたかのように見えたが、静かな老後の生活を知ることなく天に召された。逝去した日の朝、彼は痛みと苦しみから解放され、安らかな美しい表情で瞑目していた。心よりご冥福をお祈り申し上げる。

三重桜陳川に負ける

樋口 怡子 (三重桜・昭和19年卒)



ウーマン・リブとか男女共同参画とか盛んに紅い気焔を上げているが、体力気力共に心もなくなってきた。

私がゴルフを始めたのは昭和四十年代の始め四十才過ぎである。既に「三重桜会」があった。十六年十七年卒の先輩方の艶やかなスイング。下級生は人数も多くロングヒッターが揃っていた。当時はゴルフ場も少なく伊勢、柵原、嬉野など難しいコースをカートもなく歩いてプレイしたものだ。その後「三重桜会」が何時まで続いたのかはつきりしない。一人二人と潮の引く様にメンバーが減り消滅してしまった。しかし、陳川十四年卒の一見査先輩はさすがで「青雲会」をリードなさっている。以前は陳川の会ではなかった様だが今は二十二年卒位の方が中心となり毎月会場は青山高原カントリーと霞ゴルフクラブを交互にしてなごやかながら熾烈な戦をしている。女性は一八、二十四年卒の姫と姐御たる私である。十八年卒の「津中一八」お前と俺の往

時の雰囲気そのままショットする會での紅顔の美少年。三重桜の夫人と家族も姫達と呼ばれ思わず白髪を揺る振り顔の皺を撫でる。陳川最後の少年達は流石まだまだ現役。私の知る限りでは「六稜球会」「六三四会」「青雲会」などがある。兎に角「男の子」はお元

金蘭会と私

小林 日出子



(三重桜20入・昭和26年卒)

気。子供の頃からのボール感覚がすぐれている。「手に取る鏡磨かずば」と良妻賢母の教育を受けた三重桜とは異なる。残った三、四人気息奄々。それでも体力保持の為せっせと練習場通いをしては陳川の会に誘われ芳れ黄色い声を上げている此の倅。練習といえは十四年卒の倉田親義先輩自ら車を運転しての毎日の練習ぶり。私もまだまだと思つと時である。

ゴルフはハンディのあるスポーツで

私達は昭和二十年四月、三重県立津高等女学校に入学し、昭和二十三年三月に学生改革によって津高等女学校併設中学校卒業という特殊な卒業証書を頂いた学年です。そのまま卒業した人、学区制の実施で他の高校へ転校した人、津高へと進み昭和二十六年三月に津高等学校を卒業した人など、入学当初には夢にも思わなかった仲間との別れでした。

私は卒業後、体調をくずし闘病生活

ある。年齢男女に依り打つ距離の差が設定されている。男性は七十才以上のシルバリーがあるが女性にはない。二十才のピチピチギャルも八十才も同じ所から打つ。此處も男社会だと思ひホームコースの青山高原カントリーへ掛け合い女性のシルバリーを作つて戴いた。願わくば全国にシルバリーを作つて八十才の常乙女、何時迄も男の子と仲良くプレイしたいと念じる昨今である。

と全員が拍手喝采。こうして「金蘭会」が生まれたのでした。

当時昭和三十三年私宅は旧三重会館の三階で自営業をしておりました。同所は津市の中心部にあり一階には郵便局や銀行があり何かと便利な場所だったので連絡場所の様になり不肖私がお世話させて頂くことになりました。以後毎年のように会を開いてまいりました。その後会員が子育ての時期に入り、出席者が少なくなり、案内状の費用を僅かな出席者のみで負担するのは難しくなりました。それで会費制での会の運営を提案し、昭和四十八年から平成十年まで年会費三百円を徴収させていただいた次第です。

先生や同窓生の計報にはお花や香典を、入院された方にはお見舞いを、阪神淡路大震災には七名の方が被災されましたが、少しでも励みになって欲しいと願ひお見舞いをしました。私達は修学旅行もしていないので、平成四年



には館山寺温泉へ一泊旅行をしました。以後毎回の開催、計画や準備などを順番で行い、今回(平成十九年十月二十三日)四十一回目の金蘭会をむかえました。私達もはや七十五才という高齢になり今回を区切りとして最後の会といたしました。最終回を記念して新名簿を作製いたしました。

私がこの金蘭会をこよなく愛し又頑張つてこられたのは一つの大きな思いがあるからです。女学校へ入学した昭和二十年の七月二十四日に津市の大空襲にあい、私は一瞬にして、母、弟、妹三人、従業員十二名を失いました。毎日深い悲しみと寂しさになせ私も一緒に死ねなかつたのかと思う日々でした。九月一日二期が始まり登校した時「アレッ!!小林さん生きていたの!助かったんやな、足あるな、幽霊と違うな!!」と口々に言い、私を取り囲み

手を取り合い肩をたいて「ヨカッタ生きていて」と一緒に泣いてくれた友達(私の家は一家全滅という噂がたっていたので)私は奇跡的に助かったのだ、皆の分も生きなければと命の尊さを感じた一瞬でした。この友あってこの友情あってこそ立ち直ることができ

たのでした。金蘭会の皆様に励まされ、勇気づけられて今日に至ったことに感謝し、何か皆様のお役に立てることがあればと会のお世話を続けさせて頂いたお陰で今日の私があるのです。有難うございました。感謝で一杯です。

風土病研究から

鳥インフルエンザ防疫へ

山家 又 祐(昭和46年卒)



み出しているようなものである。

鳥インフルエンザは東アジアから起り、東欧、アフリカ・サハラ以南の国々にまで拡がっている。このような地球規模で疫病の拡がることをパンデミックという。わたしの仕事はその鳥インフルエンザのパンデミックをその根源から断つための大掛かりな努力のなかの一コマを担うことである。同じようなことをしているところはたくさんあって、国連世界食糧農業機関FAOのほか、世界保健機関WHO、世界銀行WB、アジア開発銀行ADB、国連国際児童緊急基金UNICEFや各国政府や欧州連合EUその他が競うように資金と人材を投入している。わたしの所属しているのは国際獣疫事務局OIEという国際機関で、第一次世界大戦後の一九二四年に創設されて、本部はパリにある。第二次世界大戦直

後一九四五年に出来た国際連合UNより二十一年古い。このOIEの活動のうち、アジアと太平洋地域をカバーする地域事務局が東京の麹町、半蔵門に近いところにある。秘書も入れてわずか十人たらずのメンバーで、ほとんどが獣医師である。鳥インフルエンザのほか、牛海綿状脳症BSEの監視もその活動のひとつである。

このような仕事に携わるまで、わたしは主にひとや動物または両者に共通して感染する風土病の地味な研究をしていた。最初の十五年半はスイス、そのあとの五年半はアメリカ合衆国、三年間をケニアで過ごした。風土病という、日本ではと死語いつていくくらい馴染みが薄いが、世界にはまだ猖獗をきわめているものがいくつもある。たとえば、アフリカ睡眠病、リーシュマニア症、住血吸虫症、フィリリア症。その多くは良い化学療法薬に恵まれない上、労働力を損なうため貧困の原因ともなり、フィリリア症(ひとのフィリリアは原則的にひとだけ、犬のフィリリア症は主として犬に罹る)を除いて動物にも罹る、そして媒介するのがそれぞれツエツエバエ、サンショウバエ、巻貝(宮入貝など)、蚊というような地域に固着して棲息する、つまり、移動距離の短い生物である。

地域に縛りつけられているかぎり風土病はエンデミック(地方病的)にとどまる。しかし、いったん束縛をとかれるとエピソード(流行性)、パンデミック

「津高同窓会報」の題字、及び

表題を書くに当たって

工藤 雅 俊(昭和45年卒)

故千草嘉夫先生の後を受けて、不肖ながら会報の表題を書かせていただく事になりました。伝統ある津高同窓会と、このような形で繋がりが持てます事を心より嬉しく思っております。「書」の道は深く、至らぬ点も多いと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

〈略歴〉

- ・日展入選七回
- ・三重県展最優秀賞、優秀賞三回、他人賞多数
- ・平成七年より三重の作家達展出品

現在 読売書法会 理事

謹慎書道会 常任理事

中部日本書道会 理事

(亀山高校教諭)

ク汎流行性となる可能性を秘めている。もともと一地域の風土病だったものが、なんらかの契機で拡がってしまい、もはや風土病とはみなされなくなっただものがAIDSやBSEやSARSやウェスト・ナイル熱などといった。契機にはひとの動きにともなう人為的なものや、気候変動などによる生態系の変化などさまざまなのがある。

鳥インフルエンザ・ウィルスは鳥から鳥に感染し、そのままでは他の動物には感染しにくいウィルスだった。ニワトリだけでなく、シベリアから南半球まで広範囲に空を飛び渡り鳥にも罹ることから、もともと国境を越えた広域にわたる性質をもっている。しかも、

鳥だけのあいだでおさまっているだけならまだしも、種の壁を越えつつある。

鳥インフルエンザと哺乳類のインフルエンザの両方に感受性を有するブタに感染が起ると、それぞれのウィルスが同じ細胞内でゲノムを複製する過程のなかで、ゲノムの断片が入り替わり、ひとへの感染能力を有する鳥インフルエンザ・ウィルスが生まれることになる。鳥からひとへの感染能力を獲得した高病原性鳥インフルエンザHPAIはすでに一九九七年に出現している。ひとからひとへの感染をするようになる一九一八―一九一九年のスペイン風邪、一九五七―一九五八年のアジア風邪、一九六八―一九六九年の香港風邪の再来の可能性が現実味をおびてくる。

たかが風邪とあなどらないでほしい。

(国際獣疫事務局OIE)

最近の「理科離れ」に思う

幾原 雄一 (昭和52年卒)



昭和五十二年に津高を卒業して、早いものでもう三十年になろうとしている。私が卒業した三年十一組は北村治郎先生がご担任であつたが、現在でも毎年正月には先生を囲んでクラスの同窓会が開かれている。私も都合がつく限りこの同窓会には参加するようにしており、先生や同級生と旧交を温めている。また、六年前に津高進路指導部から、「自分探し」ということで学生に話をしてくれないかという依頼があつた。私で役に立つかどうかは疑問であつたが、お引き受けすることに、二十数年ぶりに津高を訪問させて頂いた。私の話を聞く津高生は純朴で素直という印象ではあつたが、彼らの真剣な目は活き活きと輝いており、私自身非常に感動したことを覚えている。

私は現在、東京大学工学部で教鞭をとっており、研究と教育、それに学内外の会議や雑用に明け暮れる日々である。毎年暮れには本同窓会報が送られてくるが、大学人としてやはり母校の

進路指導事情は気にはなる。会報の大学合格者の数の欄を見るたびに心の中で後輩諸君にエールを送っている。本学で教鞭をとってもう十年になるが、その間一名だけ津高の卒業生が私の研究室で卒論を行ったことがある。本学の場合、私立の中高一貫校から入学してくる学生数が圧倒的に多い中、よく来てくれたといった心境でもあつたし、ひそかに嬉しくも思った。

通信業界での二〇年

庄司 勇木 (昭和58年卒)



私は昭和五十八年三月に津高を卒業し、それ以来ほとんど二十五年間東京で生活をしている。帰省するのは年に

決えずに学生をとっているが、その兆候が徐々に顕著になっており、学内会議でもしばしば問題に挙げられている。言うまでも無く、現在日本の繁栄や豊かさは科学技術に立脚していると言っても過言では無いと思う。ここに至って若者の「理科離れ」である。工学部では、特にこれまでの基幹産業を支えてきた電気系や原子力系は全国的にもなかなか学生が集まらず、理学部でも物理系学科は以前ほどの人気はなくなっている。

我々もしばしばその原因について各部局の委員会でも調査し検討している。その結果、理工系が今の高校生にはあまり魅力的に映っていないらしいということが明らかになってきた。私が驚愕したのは、現在の高校生の物理履修率が二十%台に落ち込んでいるという

一回か二回であるが、その際に津の変化を観察してきた。

津と大阪の間を車で移動することが多いのだが、国道23号線沿いの風景は大きく変わった。古いショッピングセンターは時間とともにさびれ、ショッピングモールは車であふれている。しかし、それによりも、国道でひととき目につくのは飲食系の建物であり、来るた

ことである。我々の頃は理系学生の大部分は物理を履修していたように思う。文部科学省もこれに対応するため、高校の教育から将来の国際的な科学技術系人材を育成することを目指し、理数教育に重点を置いた「スーパーサイエンスハイスクール(SHS)」構想を開始している。我々もこれに呼応するかたちで、分担して高校への出前講義を行い、理工系の面白さ、重要性を説いている。我々はこのような地道な活動も科学技術立国日本の復活のためには重要と考えている。幸いにも津高も今年からスーパーサイエンスハイスクールに選ばれたと聞いている。是非この制度を上手く活用され、将来の日本の科学技術を支える多くの学生を理工系の大学に送り出されることを期待している。(東京大学教授)

びに新しい店が出現しては、入れ替わっている。全国的なチェーン店もあるが、大半は東京では見掛けない地元の店である。最近では東京にも負けないおしゃれな店も増えているように思う。

地域にはそれぞれの特色がある。それは非常に感覚的なものであるが、そのような地域特有の差異を感じることは旅をする一つの理由だと思う。しかし、旅の場合はそれは一過性の体験であるが、「国道23号線」の変化を定点的に観察することは、私にとってもすれば東京一辺倒となる価値観を矯正する貴重な機会となっている。

現在、私はイー・アクセスという通信会社で制度関連の仕事をしている。制度とは、通信業界を管轄し規制している役所・総務省との交渉を行う仕事である。役所に通い、意見書を提出したり、研究会に参加し意見を陳述することにより、規制緩和を働きかけた後、周波数の割当を受ける。その動向がビジネスの成否を決める決定要因になる場合も多く、重圧感のあるきつい仕事である。

役所を動かすためには、私企業の利益のみを主張するだけでは駄目で、我々のビジネスの進展が、消費者にどのような便益をもたらすかを説明する必要がある。そのため、立ち位置を会社の中にとどめず、公共性という観点から市場を俯瞰することに掛けている。

大学を出てから二十年がたったが、携帯電話とインターネットの出現により、市場の様相は大きく様変わりした。その変化は、一言でいえば、「知る」と「つながる」ことの手段の大きな変革である。インターネットによりさまざまな生活情報を容易に入手できるようになった。また、携帯電話やメールで既知の人とのつながりがより便利にできるだけでなく、未知の人とつながる機会も増えた。しかし一方で情報格差や、ある種の犯罪の補助など、負の側面ももたらした。

携帯電話、インターネットの発展が本当に生活を豊かにしたかどうかかわからないが、これからは携帯電話やイン

ターネットと共存しつつ、より安全安心な生活環境をつくるしか道はなく、その責務は我々通信会社にも当然重くのしかかっている。

しかし、インターネットの素晴らし

さは、人々の自由な活動が保障されているところである。その道も通信会社からではなく、インターネットで生きる人々の多様な価値観の中から生みださなければならない。必要なのは、イ

ンターネットの中の「国道23号線」に目を向けることだ。そこにこそ生活に根ざした、生きた知恵があるように思う。(イー・アクセス株式会社 専務執行役員企画本部長)

同窓会副会長就任のご挨拶

奥田 榮子 (昭和34年卒)



多岐にわたりご活躍の方が大勢おられますのに、社会に出て勤めた経験もなく、何の取り得もない私がと危惧を抱くばかりです。ただ、これまで学年幹事として、幾分同窓会に親しみ、お顔見知りの皆様がいて下さいますので心強く思っております。皆様の足手纏いにならないよう一生懸命勤めさせて頂く覚悟です。どうぞよろしくお願い致します。

在学中の恩師もご存命の先生方が少なくなり寂しくなりました。木造の校舎も火事で焼失し、ギンギン鳴る校舎をつなぐ廊下も昔語りです。校舎の間の中庭のクローバーの上で、先生を交えお弁当を広げたり、歌を歌ったお昼休みがなつかしく思い出されます。校庭の樹々や運動場の周りの桜がわずかに当時を偲ばせてくれます。

新しい校舎で学んだ後輩の方々が多くなった同窓会が、ますます元気で、交流の輪が広がればと念願しております。その一助としてお役に立てれば幸いです。

瀬古 淳 二 (昭和38年卒)



この度、副会長の大役を仰せつかった瀬古淳二です。よろしく願いたします。同窓会と私の関係は、津

高一〇〇周年を迎えた年に母校に赴任したことから始まります。式典当日、元外務大臣木村俊夫氏を初めとしてOBや関係者が多数ご出席されたのを目の当たりにして津高の歴史の深さを強く感じ、翌年、校務分掌が同窓会係になり、以後、同窓会担当の長谷川寛先生から十一年に亘って「津高同窓会への想い」をしつかり学ばせていただき

ました。先生のこの心を伝えていくこと、一一〇年祭でお世話になったOBの方々への恩返しをすること、同窓会と学校のパイプ役になること等が私の使命と考えています。津高同窓パーティーのシステムは、係りの私達が考案したのですが、担当学年のすばらしいご努力で定着し、発展を遂げていることは嬉しい限りです。同窓会の発展を祈りつつ新任のご挨拶とさせていただきます。

津高33同窓会

スイス九日間の旅

長谷川 登代子 (昭和33年卒)



私たち三十三年卒三十名は、六月十九日から九日間スイスを旅行しました。参加者全員で空港ホテルに前泊。三浦さんの司会で始まった懇親会は五十年ぶりの出会いもあり笑顔と歓声でいっぱい。代表の松本さんから、今回の旅行成立の経緯(遠山病院五十周年行事に講師としてスイスから来津した同期の米川泰弘さんを囲んだ懇親会)を聞き、同窓会旅行に夢を膨らませた結団式でした。

最初の観光地はジュネーブ。二日目はモンブラン、ヨーロッパの最高峰「白い山」は絵葉書では感じられない

堂々とした姿で私たちを迎えてくれました。少し息苦しさを感じた人もありましたが、お医者様も参加者で安心。ツェルマットで二連泊、四〇〇〇m級名峰群が一望できるといってゴルナグラード展望台は電が降る大荒れ天候でしたが、街の近くの展望台からピラミッド型のマッターホルンを満喫することができました。そしてグリンデルワルドでも二連泊。ここでのメインは何といってもユングフラウ観光。アルプスの花畑の中に続く一本の道を、互いに労り合いながらのハイキング、気分はマインナス五十歳、心に残る旅の「コマ」です。

米川泰弘さんに出会ったのは六日目、ルチェルンの素敵なレストランでした。そして翌日、彼の勤務するチューリッヒ大学へ。「世界の権威と言われる脳外科医」として今なお活躍中の米川さん。何十年の時を経て「ひまらや杉の友」と異郷の地で同窓会ができたことを心から喜んでくれました。

アルプスの名峰に感動し、美しい自然に酔いしれ、異郷の地で活躍する同窓の友に励まされたスイスの旅。先日、アルバム作りを一手に引き受けてくれた近藤さんから「帰国してからみなさんとパソコンの画面を通して殆ど毎日



私は、今年度、佐賀で行われたインターハイに出場し、入賞を果たすことができました。

陸上競技といえば、まず第一に走る

ことを思い浮かべるかもしれませんが、

私が取り組んできたのは主に投擲競技の中の円盤投げです。円盤投げは直径二・五メートルのサークルから円盤を投げ、その距離を競う競技で、高校男子の円盤の重さは一・五キロ

グラムです。一回の試技にかかる時間はとても短く、一見、簡単そうな競技ですが、実はいろいろな技術が組み合わさっていて奥が深い競技です。円盤を投げるとき、特に重要なポイントが、投げ出す瞬間の速度と角度、そして、円盤に与える回転です。さらに、技術だけでなく天候と風にも記録が左右されます。これら全ての条件が絶妙に絡み合っ

て記録がでた時は言葉にできないような喜びがあります。

高校へ入学してからの最大目標は三年生のインターハイにおいて、優勝することでした。今回の佐賀インターハイの男子円盤投げは過去に類を見ないほどレベルが高く、強豪揃いで、当日は、自分の気持ちも高まり、調子もよく、ベストの状態です。試合を迎えました。一次予選、風は悪かったものの二投

目で予選通過し、午後からの決勝に挑みました。決勝に残ったメンバーは一年生の時の国体、二年生の時のインターハイで顔を合わせたことのある選手達でした。決勝が始まってから風向きが変わり、絶好の風が吹き始めました。これはいいかと思ひ、全力で投げた結果、二投目に自己記録を三センチ更新して二位につけることができました。しかし、他の選手達も続々と記録を伸

自分を成長させた 佐賀インターハイ

3 年 小 野 真 弘

お会いしました。カメラマンの役目を拝命してよかったと思っています。ありがとう」とのメッセージを添えて素敵なアルバムが届きました。地元でお世話をして下さっている人たちも含めて感謝々々。兵庫県西端の地に住んでいますが、津高卒業生であったことの幸せを感じています。

物 故 者

謹んでご冥福をお祈りいたします。

(平成19年10月31日現在)

(敬称略)

客員	長 瀬 ふさよ	24	小 林 重 一	22	岩井(林)久子
	脇 田 裕	24	高 藤 剛	22	大矢(金丸)鈴子
S 16	奥 村 操	24	水 谷 次 男	24	吉川(岡)はるみ
26	宇留田 肇	24	矢 野 真一郎	21入	真弓(真弓)秀子
27	覚 井 靖 夫	24	米 田 塙	高 S 24	野 村 欣 一
陳 T 15	中 川 義 信	21入	長谷川 栄 次	25	冬柴(佐脇)啓子
S 2	大 橋 延 郎	三 T 8	中村(鷲野) 雪	26	倉田(山本)宏子
4	井 口 惣 市	13	馬場(太田)道代	26	川 口 圭 一
4	中 尾 実三郎	14	森 (萬濃)あや	26	板垣(青山)秀子
6	高 岡 清	14	田上(田上) 照	26	吉岡(松田)よし子
6	清 水 勝 馬	15	伊藤(木村)正子	26	尾 崎 正 博
9	池 山 利 正	S 2	中條(井上) 昌	26	小 畑 佳 弘
9	山 崎 忠 治	3	石田(辻)こう	27	上 島 雄次郎
12	丹 羽 征 夫	3	小 林 登代子	27	川喜田 貞 久
12	井 戸 光 夫	4	西井(塩田)美枝子	27	前 川 文 子
13	丸 岡 亮 一	5	林口(加藤)幸子	28	鈴木(大西)かつみ
13	中 崎 新 次	7	中小路(牛場)艶子	29	笠 井 常 男
14	池 上 修 夫	8	岡野(横山)久子	30	吉 田 明 典
14	中 条 純 夫	10	浅 沼 つ る	30	加 藤 重 延
14	宮 崎 藤 一	10	益 川 久 子	31	伊 藤 光 雄
14	松 原 正 見	13	高田(福田)チェ子	31	岡 正 剛
14	佐 脇 義 次	14	西谷(原) 文	31	藤 沢 静 文
17	坂生(伊藤)昂三	14	田中(野呂)八千代	33	辻 下 正 幸
17	草 川 一 郎	15	松田(丹羽)あい	34	奥 田 八重蔵
17	中 森 寛 人	15	田口(岡)華子	34	池田(伊藤)惇子
17	赤 塚 章 一	15	蒔田(松浦)敏子	34	田 中 博
17	小 川 栄 一	15	辻 郁 子	37	横 田 浩 一
18	山 崎 茂 郎	16	広瀬(別所)美代子	37	宮本(川村)幸子
20	小笠原 清 二	17	笹古(藤村)聡子	38	船富(山田)昭子
20	伊 藤 研 二	18	浅 野 八重子	38	小 田 たづ子
20	服 部 忠 二	18	浜田(川北)芳子	38	百 々 路 雄
22	奥 山 貞 夫	18	松 野 昭 子	38	中川(長島)直美
22	陣 野 昇	19	小 沢 幸 子	38	松 岡 清 観
23	山 岡 晃 裕	19	北 村 泰 子	48	宇佐美 和 彦
23	今 中 裕 泰	20	石 地 日出子	50	前 田 繁 樹
23	池 田 安 司	20	服部(服部)啓子	51	田 島 誠
23	武 田 超 彦	20④	岩田(清水)悠紀子	H 19	山 中 和 樹
23	倉 田 清 彦	20④	宮田(宮田)幸恵		
23	西 川 垣	20④	川合(山脇)千代子		
24		22	寺辺(堀)光子		



僕は五月に開催された三重県予選を経て、八月二十四日から二十六日にかけて東京の日本棋院で行われた「第三十一回文部科学大臣杯全国高校囲碁選手権」に出場し、全国第三位の成績を収めることができました。

全国高校囲碁選手権に出場して

1 年 闇 雲 翼

ばし、結局六位という結果に終わりました。結果をみるとわずかに二メートルの間に二位から八位までがひしめく大混戦でした。

今回の大会では、自己新を出したもののわずかな差で負けたことはとても悔しく、何か自分に足りないものがあつたのだと考えましたが、プラス面に考えればとても良い経験になったのかもかもしれません。思えば、陸上を始めてから今まで自己ベストを出して結果に満足できなかったということはありませんでした。今回、初めてこのような経験

験をし、もちろん悔しい思いはありましたが、自分自身を見つめなおす良い機会となり、この悔しさを無駄にすることなくこれから先への大きなステップにしていきたいと思っています。

今まで三年間、陸上競技に打ち込んでこられたのは、顧問の先生はじめ諸先生方、苦しい練習を共にしてきたクラブの仲間、そして様々な形で応援してくださったみなさまのおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいです。今後もしっかりと培った力と経験を心の糧として頑張っていきたいと思います。

囲碁と聞いてもピンとこないという方が多いのではないだろうか。囲碁とは、黒石を持った人と白石を持った人が交互に石を碁盤に打ち合つて陣地を囲い合い、その陣地の広さを競つゲームです。囲碁は深い読みの力が要求されるなど厳しい面もありますが、相手との調和を図りながらプレーする素敵なゲームだと思います。

さて、その全国大会は緊張との闘いでした。結果を残せるかという緊張で頭が真っ白になりそうでした。ベスト8に進出して二目に残れた時は涙が出るくらいほっとしたのを覚えていました。三重県代表の重みを感じさせられました。

また、この高校選手権の経験から他

にも多くのものを得ました。まず大きな自信になりました。三位という結果もそうですが、何より、長年続けてきた囲碁で結果を残せたことが本当にうれしかったです。さらに、今大会では苦しい形勢を粘り抜いた試合が少なからずありました。囲碁で劣勢を粘ろうとする力は、苦しい状況に追い込まれ

津高校進路指導状況

進路指導部 鈴木 達哉 (昭和53年卒)

進路指導部では県下のトップ校として、単に大学進学を目的とするのではなく、「志」ある生徒を世に送り出すべく、日々指導に当たっています。三年間の進路ストーリーに基づき、進路指導のみならず、キャリア教育の視点に立つて人間力を鍛えたいと願っております。そのため、校内における課外授業やガイダンスの充実はもとより、「自分探し」と称して、生徒に自己選択力をつける企画を多く取り入れていきます。今年は従来の大学模擬授業や医学部体験、卒業生座談会などに加えて、小論文・ディベート講座を実施し、体験だけでなく、論理思考・コミュニケーション力の養成にも努めています。これらの企画を実施するにあたって、中山正隆様 (昭和44年卒)、入江史様 (昭和32年卒)、多くの大学生OBをはじめとして同窓生の皆様にひとかたならぬご尽力をいただいております。あらためて御礼申し上げます。

でも諦めず、打開策を模索する力に生きてくると思います。このような貴重な経験ができ、本当に幸運でした。最後になりましたが、僕がこの選手権に参加するにあたり様々な形で支えてくださった方々に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
(2007) H19年	233	47	836	18
(2006) H18年	242	48	787	8
(2005) H17年	211	48	687	7
(2004) H16年	246	41	811	11

一方、今春の進学状況は国公立大学合格者二八〇名は県下のトップ、また旧帝大をはじめとする難関大合格者数は過去最高の前年をさらに上回る八五〇名、国立医学部一〇名を加えて九五名が難関を突破しました。結果を踏まえながら、現状に甘んずることなく、一人一人の生徒が「津高で学んでよかった」と思えるよう努力をしてまいります。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

(主要大学合格者数)

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋	東京工大	東京外大	横国	静岡	金沢	信州	名古屋大	名古屋工大	三重大	京大	大阪大	大阪府立大	神奈川	奈良	広島	慶応	早稲田	上智	青山学院	中央	東京理大	日本	明治	法政	立教	南山	名城	皇学館	龍谷	京都産業	同志社	近畿	立命館	関西	関西学院				
(2007) H19年	6	3	1	0	3	4	1	1	6	6	8	7	31	2	9	64	5	12	17	1	10	4	10	1	6	17	26	5	8	20	40	4	21	6	4	46	59	28	10	10	67	31	81	51	34
(2006) H18年	7	2	4	1	4	3	3	2	3	6	7	3	20	11	11	79	0	9	20	3	12	2	11	4	3	19	28	3	8	15	33	11	12	9	8	36	39	35	19	9	56	34	112	48	39
(2005) H17年	7	3	8	1	3	2	1	4	2	10	8	1	14	12	7	62	1	11	8	2	7	5	6	4	4	14	30	1	2	5	13	9	15	3	5	32	33	20	10	13	33	38	108	34	16
(2004) H16年	8	2	3	2	6	2	1	0	7	13	12	8	25	10	10	65	0	6	12	6	6	5	4	2	1	23	24	4	10	12	23	6	11	9	4	57	39	16	18	12	50	31	132	57	19

各地で同窓会開催

東京同窓会



東京同窓会は五月二十六日(土)霞ヶ関ビルで開催、出席者は一〇名。本年度は役員改選年度にあたり、谷口武会長以下全員留任の決議をしました。

まず中村孝明会長が歓迎の辞を述べ、古市恒夫本部副会長の挨拶の後、渡辺久孝校長より現況報告がありました。招待恩師は世界史の岩田先生と元校長の鈴山先生でした。岩田先生の乾杯の音頭で懇親会を始めました。

懇親会では最若年会員神祥吾君と恩師にご挨拶を頂き、最後に、陳川・三重桜・津高の校歌を斉唱して、来年五月三十一日の再会を約してお開きとなりました。(幹事一同)

九州同窓会

第十八回津高九州同窓会が、六月三日、福岡国際ホールで開催されました。

本年度は九州同窓会会長急逝のため、会長不在のままでの総会となりました。

竹林武一副会長、渡辺久孝校長より現在の津高の近況報告をお話いただいた後に、出席者全員の自己紹介の場を持ちました。

久々に学生の参加もあり、「ダンス部」の設立当初のお話を聞くことができ、和やかなひとときを過ごすことができました。

若い世代の参加が、会の原動力になります。私達も若い人が参加しやすい会をめざし努力いたしますので、多くの参加を期待しています。

松田 悟(昭和58年卒)



名古屋同窓会

名古屋同窓会は、九月十五日、名古屋東急ホテルにて本部より飯田俊司会長・藤岡美也子副会長、津高からは渡



辺久孝校長先生、事務局の佐々木とし子様をお迎えし開催されました。

出席者が減少傾向にある中で、後輩の皆様のご努力によって、今年のお席者は一四〇名となりました。

総会に先立って神宮少宮司の高城治延様(昭和35年卒)の「神宮と御遷宮」と題してのご講演は、式年遷宮を控えて、日頃はお聞きすることのできないような貴重なお話を、うかがうことができました。

懇親会では、津市にまつわるクイズに興じ、ご馳走でお腹が満たされたこともあって、楽しいひと時を過ごすことができました。最後は、校歌の斉唱で閉幕、来年度の再会を約して散会となりました。若原路子(昭和27年卒)

京都同窓会

第四十一回京都同窓会は好天に恵まれ十月二十一日平安の森京都に於いて開かれました。「おいでやす」の中西会長の挨拶に始まり中尾幹事の司会で

式次第にそって運ばれました。

来賓の瀬古淳二副会長は、副会長に就任後の初めてのお仕事で京都同窓会の出席ですとご挨拶されました。渡辺久孝校長先生は、津高生の全国レベルでの活躍、文部科学省のSSHの指定を受けた事等くわしくお話下さいました。母校の発展に誇りを持った次第です。和田ひで子様からは事務局のお話を色々伺いました。例年の通りアットホームな総会となりました。

京都同窓会は先輩方のご尽力の灯を消すことなく創意工夫を重ねてまいりたいと思っています。京都同窓会へどうぞおこしやす。

山木セツ(昭和28年卒)



大阪同窓会

第四十一回津高大阪同窓会は、十一月四日(日)大阪天王寺都ホテルにて、同窓会本部より田川敏夫・奥田栄子副会長、佐々木とし子様、津高より渡辺



久孝校長先生、恩師の森下千瑞・後藤賢先生をお迎えして開催されました。

総会では、奥田大阪同窓会長、各来賓方のご挨拶の後、講演として本年度プロジェクトチームの一員でもある、三谷勲氏(昭和36年卒、元神戸大教授)より、「地震」についてユーモア且つ有益な話を聴講しました。その後和やかな懇親会に移り、旧友との思い出話や近況に花を咲かせつつ、プロジェクトの出番となり、素敵なアンサンブル演奏と全員でのカラオケ合唱を楽しみ、恒例の福引も抽選とじゃんけん勝ち抜き方式で大いに盛り上がりました。現役学生の自己紹介を経て、最後に校歌と「故郷」の斉唱で来年十一月九日(日)の再会を約して散会しました。

諸岡節生(昭和36年卒)

寄附

陳川66回・三重桜47回同級会(昭和24年卒)の皆様より、三十万円を同窓会に、ご寄付いただきました。謹んで、お礼申し上げます。

お知らせ

平成二十年度 同窓パーティー

日時 平成二十年八月二日(土)
午後三時より場所 津センターパレスホール
津都ホテル担当学年幹事 昭和50年卒(代表 中浜 貴行)
昭和62年卒(代表 伊東 直人)

平成十九年度の総会・パーティーを終えて

実行副委員長 落合 賢治(昭和61年卒)

八月四日(土)、仲間・思い出・新しい出会い」というテーマのもと、津センターパレスホール・津都ホテルを会場に、平成十九年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが盛大に開かれました。

総会は、物故者黙祷・代議員会報告



と同窓会新役員の紹介後、本年度より津高同窓会会長に着任された飯田俊司様から挨拶をいただき、渡辺久孝校長のご挨拶へと続きました。

華やかな中国獅子舞を披露、そして、竹林武一副会長の元気がつユーモアのある乾杯の御発声のもと、明るい雰囲気でお懇親会が始まりました。円卓の着席スタイルで料理を配膳し、飲み物等を幹事学年でお運びするというスタイルが、高齢の方々にも評判が良く、ゆったり、たっぷり時間を過ごしていただけたようです。次年度の担当学年の挨拶が終り、来年度も元氣よくみんなが再会できることを誓い、名残惜しくパーティーは終了いたしました。

幹事学年として至らぬ点がありましたが、お手伝いができる機会を与えていただき本当に感謝しております。

次年度同窓会を担当するにあたって

運営委員長 中浜 貴行(昭和50年卒)

平成十九年度も先輩方の尽力によって盛会裏に同窓会が執り行われ、誠に喜ばしく思うと同時に我々の学年がどこまで近づけるか不安になっております。しかし母校の同窓会の幹事という荣誉な仕事を与えていただき、同級生一同、できる限りの努力をいたす所存でございます。

準備に取り掛かって感じていたことは、十二歳下の副幹事学年の方との交流の中で、同窓会に対する思い入れに温度差があることを痛感いたしました。

この先世代が変わると同窓会への意識が希薄になりはしないか、今の個人主義的な若者世代を見ていると、我々幹事学年の者はそろって同窓会そのものの危機感を抱いてしまいます。そ

こで我々の行う同窓会ではできるだけ若い世代との交流の場として、皆様に御提案できたらという思いで企画させていただきました。型にはめずに、皆様にも世代を越えたコミュニケーションの場としての同窓会となるべく、ご理解と指導を賜りますことをお願いいたします。伝統ある津高同窓会の更なる飛躍と世代を越えた語らい、そして先輩から後輩にメッセージを送ることができると同窓会を目指して一同がんばりたいと存じます。

『津高卓球部60年史』発刊

このたび『津高卓球部60年史』を発刊いたしました。卓球部の伝統・歴史、又強かった時代、それでもなかった時

同窓会

『縦の交流を深めよう』企画!!

★(学年対抗)ゴルフ大会

日程 平成二十年三月三十日(日)
場所 三鈴カントリー倶楽部
(鈴鹿市小社町七六七)

参加費 一六、〇三〇円(キヤディー・昼食)
(プレー費・パーティー代・会費含む)

申込締切 平成二十年二月十五日(金)
定員 百六十名(定員になり次第、切)
各学年は三名以上二十名以内

お問い合わせ・お申し込み先

津高同窓会事務局

★旅行

行先 世界遺産アンコールワットと
ベトナム縦断八日間(関空発)

日程 平成二十年一月二十八日(月)
〜二月四日(月)

費用 二五四、〇〇〇円

(全食事・ホテルグレードはA利用)
申込締切 平成十九年十二月十日(月)

お問い合わせ・お申し込み先

JTB中部津支店・梶本まで
TEL(059) 228-0203

代の変遷をそれぞれの学年の編集にて構成されています。

その足跡を見よつと思われる方に(昭和31年〜49年までの写真CD付)を限定50冊販売させていただきます。

申込先
松生卓球道場(松生幸一・昭和39年卒)
〒540-083 津市半田池町五九二
TEL・FAX 059-2467500
金額 五、〇〇〇円(送料含む)

津高同窓会の
ホームページ
1月末スタート

<http://tsuko.jp/>
メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331

事務局だより

▼会報四五号をお届けいたします。

二万二八〇〇部の発送です。

▼「大正十一年七月津高女」と刻んだ花崗岩の石柱が浜見町から発見されました。津高女(柳山校舎)のものとされますので、津高正門の津高女銀杏の木の下に設置しました。

▼ホームページは、只今お休みしておりますが、一月末日、再開の予定です。

▼住所異動される際には、卒年・新住所をお書きの上、必ず事務局までお知らせ下さい。葉書・FAX・メールにて受け付けております。

▼事務局開局日 月・火・水・金曜日
午前九時十五分〜午後四時十五分